



【放蕩息子に対する父なる神の愛】

説教者: 鄭南哲牧師

本日聖書本文: ルカの福音書 15 章 11-24 節/暗唱聖句: マラキ書 4 章 6 節

<父の日の始まり: キリスト教会から始まったのをご存じでしょうか。>

1909年にアメリカ・ワシントン州スポケーンのソノラ・スマート・ドッド (Sonora Smart Dodd) という娘さんは、男手1つで自分を育ててくれた父を讃えて、教会の牧師にお願いして父の誕生月である6月に礼拝をしてもらったことがきっかけとされています。彼女が幼い頃南北戦争が勃発。父ウィリアムが召集され、彼女を含む子供6人は母親が育てることになるが、母親は過労がまもなく召されました。以来男手1つで育てられたが、父ウィリアムは子供達が皆成人になった後、召され、最初の父の日の祝典は、その翌年の1910年6月19日にスポケーンで行われるようになりました。当時すでに母の日が始まっていたため、彼女は父の日もあるべきだと思い、「母の日のように父に感謝する日を」と牧師協会へ嘆願したことにより、1916年、アメリカ合衆国第28代大統領ウッドロー・ウィルソンは、スポケーンを訪れて父の日の演説を行い、これにより父の日が広がるようになりました。そして、50年後1966年、アメリカ合衆国第36代大統領リンドン・ジョンソンは、父の日を称賛する大統領告示を発し、6月の第3日曜日を父の日に定められ、1972年にアメリカでは正式に国の記念日に制定されました。母の日の花がカーネーションなのに対し、父の日の花はバラ(存命中の父に赤バラ・故人父親には白いバラ)でした。娘ソノラ・スマート・ドッドが、父の日に父親の墓前(ぼぜん)に白いバラを供えたからとされています。日本でも、それに従い、6月第3週日曜日は父の日となり、日本では別に決まっているわけではないですが、赤いバラか、家族の愛情と尊敬を表す意味として、黄色のバラを贈るようになっていきます。

ちょうど本日日曜日が父の日ですので、いつものお父さんへの感謝を、今日の日だけでも積極的に表し、伝えればいかがでしょうか。是非家族で、牧場でお父さんに感謝と愛の心を伝え、あらかず幸いな“父の日”となりますように!

<家族の中欠かせない大切な存在お父さん!>

以前も紹介した事がありますが、お父さんの存在に対してこのような話があります。

<タイトル: お父さん!>

4歳の時、お父さんは何でもできると思った。

7歳の時、お父さんは何でも知っている天才だと思った。

8歳の時、お父さんと先生、どちらがもっとえらい存在なのか考えた。

12歳の時、お父さんは実に知らないことが多いんだなと思い始めた。

15歳の時、お父さんの考え方が古い人だと距離を置き始めた。

25歳の時、お父さんを理解はするが、お父さんの世代はもう過ぎ去ったと思った。

30歳の時、子どもができたら、少しお父さんの気持ちが分かるようになった。

40歳の時、何かを決める前にお父さんの意見をも聞いて見たい。

50歳の時、お父さんが恋しい! 会いたい!

60歳の時、お父さんは自分よりもはるかに立派な人だった。素晴らしい存在だった。

お父さんは死んだ後にも、いつまでも久しくお言葉が思い出される人だ。いやお父さんは生きていた時より、死んだ後になってからこそ、さらに恋しくなり大きな存在だったことが分かるようになる。

お父さんは決して無関心の人ではない。お父さんが無関心の人のように見えるのは、体面と、プライドと子供たちへのすまない気持ちがまざってすぐにおもてに出せないだけだ。

お父さんの微笑みは母のそれより2倍も濃い。お父さんは家では大人のふりをするが、自分の友に会うと少年になる。お父さんは家族の前で恥ずかしく思い祈ることが難しいが、一人になると運転の時でも、大声で祈り、絶対者に叫びながら家族のため助けを求める存在だ。お父さんが一番の幸せを感じる時は、子供から尊敬していると言われた時であり、家族から愛していると言われる時である。お父さんが一番悲しい時は、家族の中でお父さんを恥ずかしがる時や自分がない方が良いのではないかと感じられる時である。

その時、お父さんは心を痛みながら泣く。お父さん! いつもかわらない。



いつもその場において支えてくれる大きな岩のような名前。その偉大な素晴らしい名はお父さん！！

聖書には600回以上父という言葉が記されていますが、その中で神の知恵書と呼ばれる箴言では続けて父親の事の大切さと影響について強調しつつ教えて下さっている内容でもあります。

箴言4章1節では「子どもたちよ、父の訓戒に聞き従え。耳を傾け、悟りを得よ。」、

箴言6章20節「わが子よ、あなたの父の命令を守れ。あなたの母の教えを捨ててはならない。」とも書かれています。

箴言13章1節「知恵のある子は父の訓戒に聞き、嘲(あざけ)る者は叱責を聞かない。」

箴言23章22節「あなたを生んだ父の言うことを聞け。あなたの母が年老いても蔑(さげ)んではならない。」

箴言30章17節「自分の父をあざけり、母への従順をさげすむ目は、谷の烏(からす)にえぐり取られ、鷲の子に食われる。」

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさんはこの内容を聞きながら、お父さんについてどう思われますか。すでに召されたみなさんのお父さんを思うといかがでしょうか。もしも、今日今生きていらっしやるお父さんが召され、いなくなるとどんな気持ちとなると思われますか。

子供たちは大きくなればなるほど、お父さんの話を聞こうとせず、無視する傾向があります。

いつの間にか自分がお父さんよりよく知っていると、よくできると思いこんでいるからではないでしょうか。お父さんのアドバイスはもう要らないと、もう古い話、つまらない話だろうと断定しているかも知れません。しかし、お父さんを尊敬し、尊重し、お父さんの話をとりあえず大切に聞き取り、従おうとする子供の人生は必ず祝福され、智恵ある者として歩めることを教えて下さっています。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 聖書では幸いな家庭、祝福される家庭はただ与えられるのではなく、お父さんが家庭でどうするかにかかっているとよく教えて下さっています。結婚すると自動的に家庭が幸せになるということではなく、家庭内での一人一人が特にお父さんが家庭の幸福と祝福のために努力すべきであります。なぜでしょうか。家族の中でも家庭に一番、影響を与えるとしたら、当然それはお父さんの存在だからです。母とその愛も欠かせない存在であり、すばらしい存在ですが、子供たちにとって父の愛は母の愛とはまた別だと思えます。

今日お父さんたちを苦しめる歪曲された偏見とプレッシャーが多い為、今日日本の中年のお父さんたちのうつ症状や自殺率が一番高いのではないのでしょうか。*お父さんは絶対成功しないと駄目?、お父さんはお金をたくさんもうけないと駄目?、お父さんは自分の過ちを先に認めたら駄目?、お父さんは先に謝ると駄目?、父親はすべて自分で決めるべき?、男性は女性より何でもうまく出来る?、愛の表現は女性たちのもの?

もしも、お父さんたちが間違った時には正直に家族に、神様にもその過ちを認める姿こそ、本当の勇氣ある男性らしさ、権威ある父の姿だと思えます。お父さんの真の権威と力は完璧から来るのではなく、裏を持ってない正直さ、真実さから来る事を忘れないようにしましょう。

変なプライド、プレッシャーをもうすてて、助けが必要な時は大胆に“助けて、祈ってくれないか。”と言えるお父さん! お父さんであるみなさんは最近心配していることは何ですか。家族に伝え、共に祈れるようにさせて下さい。お父さんだけ一方的ではなく、家族がお互いに愛を申し合、支え合うみなさんの家族となりますように心から願っていることではないのでしょうか。実はお父さんこそ家庭の中でだれより家族からの愛の言葉(尊敬・認める言葉、立たせる言葉、励ましの言葉・感謝の言葉)が必要な存在です。

こんにち社会と家庭はさまざまな問題にかかわっています。その中で多くはいつの間にか家庭の中で仕事やさまざまなことで忙しく、お父さんが家族の中に不在になってしまったこととともに、父の役割と機能を知らない父親を通して子供の役割と機能を学ばされなかった子供たち!こういった悪循環によって、数多くの事件や問題が家庭の中で起こされているのではないかとつくづく思います。心理学者であるヘンリー・ビラーという博士はこう指摘しました。

「今日、父たちを家族に戻せなければならない。そして、父たちに一番大切なのは父としての精神と自信をもう一度、取り戻す事が家庭の中でもっとも大切である。」

良くても、悪くても父親の影響力は子々孫々にまで続くものです。お父さんの存在は自分の人生に決して欠かせない大きな存在であることを否定することはできません。ですから、お父さんの存在はとても大切な存在です。

【良い父親になるための十戒】

- ①父親の価値観を教える：子どもの人生は、父親の生き方を通して決定的な影響を受ける。
子どもたちに何が大切で、優先なのかを教えられる親になる
- ②子どもたちを一日一回以上抱きしめ、愛していると告白する：父親の体温を子どもたちに感じさせる。いつでも子どもたちに愛していると言う。愛される子どもが愛することができる。
- ③子供たちとした約束は必ず守る：父親と子ども間の信頼が崩れると、愛も崩れる。父親を信頼出来なければ、だれも信頼することが難しくなる。
- ④妻と幸せな姿を見せる：両親が愛し合う姿を見て育った娘は、男性から愛を受け、息子は姿勢を見て愛することが出来る。両親がする通りに子どもたちは生きる。
- ⑤子どもたちを褒め、励ます：ほめれば成長し、励ますともっと強くなる。足りないと感じられる時、ほめよう。
子どもたちに褒め言葉より良い訓練はない。うまくできないときこそ、励ましが必要
- ⑥子どもたちと共に時間を過ごす：助言が先にならず、子どもたちの話を聞いたり、一緒に子どもとふたりの時間を過ごしてあげる、自分の側に立ってくれる父親を求めている。
- ⑦成熟した信仰者として模範を見せる：父親を通して神を経験する。これが神様が家庭に与えられた奥義である。
主イエスに似ていく成熟した信仰者として生活をするように努力を尽くす。
- ⑧家庭のビジョンを共に分かち合う：家庭のビジョンを立て、子どもたちも共に期待と夢を描き、持つようにする。
- ⑨親と老人を敬う姿を見せる：年長者を大事にせず、親を敬わない人は、神様の御前でも、世の中でも成功できない。
敬語と挨拶を正しく教える。
- ⑩他人へのマナーと倫理を教える：他人を配慮することのできる心と他人に迷惑をかけない態度を教える。
幼い時から秩序を守る訓練をする。

愛するみなさん！家庭は愛の源であり、祝福の源になるべきです。しかし、その家庭の中愛と祝福の根源地がどこからなのかとすると、聖書ではお父さんがどうするかによって湧き出る祝福の通路となり、神から与えられた家庭が愛と祝福に満ち溢れるようになれることを聖書は強調し、教えて下さっています。

*隣人（水平）へ救い以前の垂直（親から子）への宣教に対する命令（聖書は信仰継承について大切に語っている）

「彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。マラキ書4章6節（旧約聖書）」

「彼は、エリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち戻らせて、主のために、整えられた民を用意します。ルカの福音書1章17節」

（信仰の継承の大切さ！）

<我らの父なる神様をロールモデルとし、常に委ねる>

我々が信じている聖書の創造主なる神様は、我らのボスとか、王様になろうと望まずに、我らの人格的なお父さん、親子のような関係、家族関係になることを望んでおられます。神様は絶えず慈しみ深く、恵み深いお方であり、耐え忍びつつ、赦して下さり、愛して下さる慈愛の父なるお方だと聖書は強調しつつ教えて下さっています。

イエス様はあの有名な主の祈りを教えて下さる時に、まず、祈る全ての者たちに神様をこう呼びなさい教えて下さいました。マタイの福音書6章8-9節『ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父(なる神)は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。9だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。』

「私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなに素晴らしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。（ヨハネの手紙第一3章1節）」

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。3私たちの主イエス・キ

リストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。(コリント人への手紙第二1章2～3節)」しかし、人はそんな父なる神様を誤解しながら、御前で反逆しつつ、父なる神の御胸から離れ、脱出し、自分勝手に行こうとします。それにも関わらず、父なる神様は諦めないで、人に対して耐え忍んで下さり、待ち続けておられ、失われた迷子を探し回っておられるお父様のです。実はこれが聖書全体の貫くテーマでもあります。このストーリーが圧縮された箇所は今日の本文ルカの福音書15章に出ているあの有名な放蕩息子のお話であります。イエス様が語って下さったこの放蕩息子のたとえ話でお父さんは父なる神様を意味し、そこに出る二人の息子たちは、我らを意味するでしょう。

<本文>

<お父さん、私に財産の分を下さい！(お金さえあれば、絶対幸せになれる！?)>

ルカの福音書15章12節を見ると、ある家の弟である息子はお父さんに啞然とした要求(ようきゅう)します。

「弟のほうに父に、『お父さん、私に財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。」つまり、弟の息子はお父さんに自分に対する遺産を分け与えて下さいと無理やり要求します。実はその財産は遺産のことを要求していることでもあります。つまり、お父さんが召される前には絶対手出しはいけないお金まで要求するこの次男の息子、弟の態度は極めて無礼でもう父親が死んでも構わないという意味をも含まれていると言っても過言じゃないかも知れません。弟の息子さんは家を離れる時、極めて攻撃的で、無礼な言動ばかりでした。生まれてからその日までどれほどお父さんに、家族に、手厚く世話をし、すべての愛情が注がれ、面倒見てくれたのにも関わらず、大切な関係を切り捨てて、こけおどしをしている姿です。

「それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。(13節)」遺産として無理やりお父さんから頂いて堂々と家を出て二度も帰って来ないからかのように行く気満々と冷酷に心決めていた弟の振る舞いでした。実際この弟は家から遠く離れていた他国の地でしばらくの間、財物全てを失い、完全につぶされなかったならば、いつまでも家には戻って来なかったかも知れません。

結局、そんなに冷酷にお父さんの家を出た弟の執着はどこでしたか。13節に、<遠い国>はこの放蕩息子が生まれ育った家、無条件的な愛と平和と豊かなさで包まれ、溢れていた家庭共同体の価値観とはまったく違う世界でした。良いものばかり多く頂き育った人はありがたさを当たり前かのように考え込んでよく分からないかも知れません。弟はお父さんの愛がどれほど尊いものかも知らず、ただ無条件的に家から離れて遠くのところに行きたがってました。ただ家から遠く離れた国に行けば、つまらない家よりも絶対楽しく、絶対幸せになれる、そうさせてくれるまぼろしのところのようでした。家から離れて、遠くのあの国まで行けば、雲に乗りそうな幸福が待っているのだと。まるで、あの弟の姿勢はまるではじめの人だったアダムとエバが神様が備えて下さった最高の場所エデンの園で暮らしながらも、満足せずに善悪の木に対して貪欲の誘惑に陥られた似ている人間の姿のように見えませんか。

ホーム(home)は我らが何も知らない赤ちゃんの時から、わたしがあなたを愛していると、ささやくお父さんの愛の御声が響いているところでもあります。信仰とはいつも我らに永遠の家がある、そして、いつも我らのために備えられ、待ち続けておられる家がある真実を疑わないことです。ところが、お父さんの声を聞き育てられた子どもがもっと成長しながら、違う声をも聞き始めます。別に家がなくても、鎖のような家、きみを束縛している家族から開放されれば、君も絶対幸せになれるよ。家を出て君の存在を見せつけろ！君はお父さんがいなくても、お金さえあれば、いくらでもお父さんよりすばらしい存在に絶対になれるから！そうすれば、お父さんは必ず君のことで驚いて、以前より君の存在を認めてくれるはずだよ！

どうして多くの人々はホームを捨てようし、家族を捨てようし、こんな世の声に耳を傾けてしまうのでしょうか。

ヘンリ・ナウウェン(Henri Nouwen)は我らが世の思考意識と仕組みになれてしまっているからだ指摘します。

「いつのまにか我らは親の愛さえも含め、まるでこの世の愛にはいつも条件付きだと思い込んでいる。自分に愛を受

ける資格や条件が満たされなければいけないと思っている。先生たちも、友人や職場の上司も、しいて親の中にもあらゆる人間関係において良い成績や良い成果、卓越した自分の能力、他の人よりもっとお金を持っているか、頭が良いのか、良い学歴を持っているか、みんなが認めてくれそうな物を所有しているかなどが愛されそうな条件、資格であるかのように思い込んでいる。自分の中にそれが整っている時こそ、周りの人々はよく認めてくれると信じ込んでいるのだと。それに、なれている人々や子どもたちでさえ、愛されるため、認められる条件を満たす為にみんな必死である。外でも家でも愛されず、認められなかったら、どうするんだという不安感に多くの人々は包まれている。」

そのようにして考え込んでいるうちに今日の弟のようにお父さんの家からどんどん遠く離れて行ってしまいます。愛するみなさん！家庭以外にどんなところでも自分を条件なく愛してくれるところがあるのでしょうか。世の愛というのは完全に条件部愛であります。

愛する信仰の家族のみなさん！自分の能力で、自分の努力だけで、人々を完全に満足させれる、人々に完全に認められると間違った独立精神が父なる神の愛を拒ませ、さらにお父さんのような存在はいなくても全然問題なく生きれるという恐ろしい反抗を生み出します。

<帰って来ることが救われる道となる放蕩息子>

本文13節によると、「それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。」と書かれています。今まで汗を流しながら、金をかせぐことをしたことのなかった弟がお金を正しく使えられたでしょうか。金を手に入れたからと言って自分がこの世の中で何でも思い通り出来るかのようにお金で一番強い存在だと考え込たかも知れません。しかし、この世はそんなにたやすいものじゃありませんでした。都市の狡猾(こうかつ)な人々にはこの弟の金を狙い、かけだしのようには弟はたやすく餌食(えじき)になってしまいました。

愛する信仰の家族のみなさん！家庭とこの世とは全然違うところでしょう。家庭は私に無条件的に与えてくれるところですが、この世では私に何もかも奪い取って行こうとするところでもあります。家庭は無条件のところですが、この世では何もかも条件付きのところでもあります。父なる神様は我らをご自身の子どもとして、家族として見て下さっているところですが、実際この世では、我らの大切なものを奪い取って束縛し、奴隷にさせようと扱っています。

弟にお金があった場合、あの世では家から離れ、自分だけで生きれそうなところでしたが、お金がなくなったら、その瞬間からはどん底の生活に落ちてしまいました。多くの周りにいた仲間たちや女たちが離れ去り、歓迎してくれたところは、嘘だったかのようにまるで以前家のお父さんに自分が冷酷にしたように、非情なところになってしまいました。結局、全お金を蕩尽(とうじん)してしまった弟は生き残る為に、生まれて始めに働きをやらなければなりません。今まで仕事をやったこともなく、何か学んだ技術もなく、強いて、なれてない新しい地で、一番卑しい豚の世話をする仕事をするしか出来ることがありませんでした。当時ユダヤ人たちにとって豚は一番不潔な動物として扱われた時代の中で、彼は豚の世話をさせる事だけではなく、その豚が食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであっても、誰一人彼をかえりみて、食べる物を与えてくれる人は一人もいませんでした。その意味はつまり、彼が生きても、死んでもだれも関心がなかったという意味ではありませんか。(本文15-16)

弟はその時、お中が空いていることも辛かったはずですが、それよりも自分の周りに自分の見方になってくれる、頼れる人が一人もない絶対孤独(utter loneliness)こそ、耐え難い苦しみではないでしょうか。堂々と家を出た時は新しい出発、自由の世界への脱出(だっしゅつ)だったのに、もう今はどこへ行けば良いか、さまよっています。しかし、逆説にこの世の厳しい本質を味わってから、それでさまよってからようやく気を取り戻すことになっています。そのままもう一方踏み出したならば、彼の人生はもう全てがつぶれそうな危機感、死の恐れが覆っていました。

(17節)「しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いるとか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。』彼は取り戻せない失敗と人生の危機を経験してから、ようやく自ら思い直す、父の家を思い浮かべられました！パンのあり余っている雇い人を思い出したのは、つまり、お

父さんの家では一番身分の低い身分の雇い人たちと比べても、現在の自分がより惨めな状況であり、父の家の雇い人たちの方が全然ましという彼の状況がよく現わされているでしょう。

ダビデは神の前でこう歌ったように、「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりは私の神の家の門口に立ちたいのです。(詩篇84篇10節)」と告白したように父なる神様の家に住まれ、父なる神様とちゃんとつながれとどまっている時こそ、人生の一番幸いな時であることをダビデは悟られていました。我らをも今日の放蕩息子のように父なる神様の御胸から離れ、人生の辛い苦しみを味わってからこそ、神様のうちに留まる祝福の価値が分かって来るかも知れません。

愛する信仰の家族のみなさん！真の悔い改めは自ら神様に方向を変えて父なる神様に立ち返ることです！
そこにもう一度生ける希望とその道が開かれます！

「18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」」21 息子は父に言った。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。」(18-19、21節)」弟がよくやったのは、人間として破廉恥で、まったく資格のない放蕩息子でしたが、残っている力を尽くし、全ての勇気を出して、もう一度父の家に帰る決心をしたことでもあります！

ところが18-19、21節をよく読んで見ると、彼はお父さんに対していつの間にか自分と同じ考え、気持ち、基準を持っているのではないかと思込んでいます。つまり、うちのお父さんもあの世で会った多くの人々と同じで、条件的で、自己中心的な人だという考えでした。以前まだ全然お元気なお父さんに無礼に財産の半分を要求し、無礼に奪い取ったかのように、無理やりもらって、家を出てそんなに立たないうちに、持って行った全ての財産を蕩尽してしまった事をお父さんが知れば、絶対自分を赦して下さるはずがないだろう、きっと僕の犯した過ちや罪に対して、必ず償えるようにされるだろう、だから、当然息子としての立場は諦めて、雇い人の条件付きなら、僕を家に入れて下さるのではないかと思っています。それでも、父の家の雇い人の方がましだから、私から、そうして下さるように離れた方がましだろう。きっとまだ激怒(げきど)しているお父さんのもつれをほぐす為にも、条件として、自らこれから息子ではなく、奴隷として受け入れてくださるように求めれば、そのぐらいは承諾(しょうだく)してくれるのではないかと願いつつ期待しているのが見えます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！人々が神様に立ち返る事をためらっている理由は どうしてでしょう。神様は恐ろしい存在、自分を裁かれる存在、条件付きの存在かのように誤解(ごかい)しているからではありませんか。多くの人々をも、自分が持っている信念やこの世の価値観や基準でまるで神様をそのような存在であるように考え込んでいる見なししている為、なかなか父なる神様を信じがたいのではないのでしょうか。

その面で我らは父なる神様に立ち返り、全ての罪を正直に告白すれば、必ず、その罪を赦して下される慈愛の父なる神様を素直な子ども達のように、そのまま受け入れ、信じるべきです。そうしなければ、父なる神様からの完全な自由と赦しの確信、その恵みを十分に満喫(まんきつ)し、楽しめないと思います。父なる神様をいつまでも、自分の中にある基準で、見解(けんかい)で、考え込んでいる限り、心から喜ばず、信仰生活もなかなか罪責感や落ち込みから解放されるのが難しくなります。「わたしの名を呼び求めているわたしの民が自らへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地を癒す。(歴代誌第二7章14節)」「もしあなたが主に立ち返るなら、あなたがたの兄弟や子たちは、彼らをつらねた人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。あなたがたの神、主は、恵み深く、あわれみ深い方であり、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔を背けられることはありません。(歴代誌第二30章9節)」

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父。」と叫びます(ローマ人への手紙8章15節)」アーメン！

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族みなさん！父なる神の無条件的な愛と赦しを信じてそのまま受け入れて下さい。人の思い、人の愛、人の力とはるかにまさる慈しみ深い父なる神様は、昔も、今も、これからも、ご

自身に立ち返って来て、言い表し、悔い改める人々に、価無しに我らの人生を新しく回復させて下さる、癒して下される、死の絶望、罪の鎖から救って下される父なる神の恩寵と恵みを施して下さい。父なる神の愛を、赦しを信じて迎え入れて下さい。人の計算では、知識では、経験では全て理解しきれない父なる神様の哀れみと慈しみを信じて頂ければそれで十分です！是非父なる神様を自分の考えで人間のように決め付けたり、考え込んでしまう過ちを犯さないように気をつけましょう。本来聖書が教え、約束して下さっている通り我らの父なる神様を知り、また信じるクリスチャンプレイズの全神の家族となりますように切にお祈り致します！

今この弟は自分が息子である資格を諦めようとした。諦めるというのは、ようやく自分が今まで何をして来た者なのか、どれほどの罪をお父さんの前で犯してしまったのか、息子としてどれほど自分には資格のない者であるのかよく自覚し、認めている放蕩息子の心境でもあるでしょう。

今日も多くの人々がこの世の中で自分が願った通りに物事がうまく行かず、大切に考えて来たものを失ってから、ようやく父なる神様の存在を気づき、父なる神様に立ち返え、見上げ、頼ろうとするではありませんか。愛するみなさん！父なる神様が今まで彼にずっとほったらかして語って下さらなかったわけでは決してありません。今まで自分の中にある声が、かたくなな考えが大きすぎて、父なる神様の御声を聞けなかったわけです。自分の中に、自分の思いの中にいっぱいにあったその声や固執が少なくなってからこそ、お父さんの温かい声が自分の心に響き、聞きたくなりました。傾けようとする心が変わって来ました。本当に感謝なのは、放蕩息子は残りの人生をそのまま諦めなかったことでした。破滅(はめつ)の直前に自らお父さんのところに立ち返った事でした。最後の瞬間まで暗闇と絶望の道で縛られ諦めたままの人生として生きようとする人たちはどれほど多いのでしょうか。

聖書では、失われた父なる神様が愛しておられる子どもたちを父なる神の家に連れ戻す為に、自ら父なる神の家に帰って来れる力を失っている我らを御父のところに導く為に、イエスキリストがこの世に来られたのだと教えて下さっています。そして、イエスキリストは十字架の上で、最後に「全て完了した(It is finished!)」と宣布されました。父なる神様から離れた人生の結果がどうなるのか、罪の恐ろしい結果がどれほど悲惨なものであるかを自ら十字架の上で全ての世の人々に見せて下さいました。そしてもうその罪の道から父なる神に立ち返って、御父の赦しを頂きなさい！と神の愛のメッセージを伝えて下さっています。

「キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの神であり父である神のみこころにしたがったのです。(ガラテヤ人への手紙1章4節)」

<すべてを赦し、受け入れてくださる御父>

ヨハネの手紙第一4章19節「わたしたちは愛しています。神がまず私たちを愛して下さいましたからです。」だと書かれています。イエス様のこの放蕩息子のお話ほど、この真実をドラマチックに立証してくれる御言葉もないと思われまます。我々が神を探し回り、神様の存在を待っていたのだと考え込んでましたが、実はそうではなく、父なる神様が私たちを探し回り、待ち続けておられたのです。我らが神様を愛する前に、まず父なる神様御自身が我らを愛され、愛の御手、救いの御手を差し伸べつつ、待ち続けて下さったのだと聖書は強調して下さいます。

愛する信仰の家族のみなさん！もしかして、その父なる神の愛の招きを断わり、離れ続けて行く事こそ、父なる神様を一番悲しまれることかも知れません！「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。(20節)」この場面は決して偶然に起こった出来事ではありません！

実はこのお父さんは息子が家を出た日から再び家に戻って来るまで家の外でずっと、ずっと出たその道ばかり見つめながら、待ち続けておられたのではありませんか。失われた息子の安否を心配しながら、その恋しい息子の顔を浮かべながら、ただ家に戻って来るだけのを待てておられたお父さんの愛！それが、本文20節にまだ家までは遠かったのにもかかわらず、このお父さんはすぐ愛するご自分の息子である事が分かりました！

そのお父さんはどんな心だったのでしょうか。かわいそうに思い(was filled with compassion for him)をしたと書か

れています。お父さんは自分に無礼にしたこと、お父さんが熱心に働いて集めた財産の半分を失ったとしても、全然そんなには構いません！ただ愛する息子が無事であったこと、どれほど家から離れて苦労して来たのか、ただ父の家に帰って来てくれたことだけで可愛そうに思っているのみでした。

お父さんは帰って来た息子に向かって走りました。当時の文化として、絶対的な権威を持っていたお父さんがいつも歩く文化でしたが、走ることなんてありえないことでした。それにも関わらず、お父さんは息子に走り寄って、彼を抱き、口づけをしました。体からどんな臭いにおいがしても、服にどんな豚のいやなおいがしても全然構いませんでした。まず、お父さんの方が帰って来た息子を行って抱きしめて下さいました。

お父さんにとって子どもはこれほど愛らしい存在です。父なる神様がこのようなお方である事実をしているのなら、いったいだれがそんなお父さんから離れ逃げて行こうとする人々がいるでしょうか。

全然思わぬお父さんの歓迎に驚いた放蕩息子はお父さんにこう言います。「**息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。(21節)』**

たぶん本来弟息子はくただわしを雇い人として使って下さいませんか。>というつもりでしたが、もうお父さんの愛の歓待に心の本音を告白してしまいます。

さらにお父さんは感謝と喜びに満ちて、家全体を宴会場のようにさせます。そして、帰って来た息子にどうされましたか。本文22-23節をご一緒に読んでみましょうか。「**ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。23そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。』**一番着物に着替えさせたり、手にお父さんの指輪をはめさせたのは、もう奴隷の身分ではなく、お父さんの息子、お父さんの全ての相続者として、家族身分として回復させるという意味であります。足にくつをはがせるということは、もうこれからは逃亡者のような、さまよう人のようなことはもう終わったという意味であります。肥えた子牛を引いて来たというのは、最高の歓待をさせたという意味であります。簡単にまとめて言えば、死の絶望と恐れに陥っていた息子を赦し、救ってあげただけではなく、家族としての関係、相続者としての身分も全て回復させ、新しい人生、豊かな人生を取り戻して下さいました。

「**あなたの神、主は、あなたのただ中であって救いの勇士だ。主はあなたのことを大いに喜び、その愛によってあなたに安らぎを与え、高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。(ゼパニヤ書3章17節)**」

「**また、主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、神を知ることにおいてせいちょうします。11 また、神の栄光の支配により、あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように。12 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることができますように。**」(コロサイ人への手紙1章10-12節)

「**私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。3私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福して下さいました。(エペソ人への手紙1章2-3節)**」

愛する信仰の家族のみなさん！このお父さんのように父なる神様は御子イエスキリストを通して、父なる神の御前で我らにも新しい人生、豊かな人生を与えるためにこの地に来られたのです。父なる神の恵みは今日我らにも注がれています。メッセージを終わらせたいと思います。失われた魂がお父さんの家に帰って来た時に、大喜んで下さったお父さんの姿が、天の父なる神様の姿であります。今日もその父なる神様は我らをも愛しておられます。父なる神様には我らの全ての罪を赦せる、癒す、回復させる御力を持っておられます。今も、さまよっている尊い魂が父なる神に立ち返り、赦され、救われ、その方であって新しい人生、豊かな人生として歩まれる事を待ち続けておられます。ですから、父なる神様の大きい愛を受け入れましょう。父なる神様の赦しと救いを信じて受け入れましょう。我らの人生が、我らの家庭が父なる神の御恵みと愛でいつも満たされますように切にお祈り申し上げます。アーメン！！